



効果はもちろん使い勝手も大事。 作業効率にも一役買っています。

北海道常呂郡置戸町
奥山 拓博さん

【プロフィール】

たまねぎ農家の3代目。2002年に就農。自宅に隣接する畑でたまねぎ11ha(早生、中生、晩生の黄たまねぎのほか、赤たまねぎを含む6種)、小麦5ha、てんさい5haを作付け。近年ではんにくの栽培にも取り組む。

質の高いたまねぎ作りのため ていねいな作業と効率化を いつも意識

北海道の東部、オホーツク管内の南西端に位置する置戸町は、西の大雪山系を源とする常呂川が流れ、肥沃な土に恵まれた、全国でも有数のたまねぎの産地です。

奥山さんのたまねぎ作りは、まだ雪が深く積もる2月下旬から約一か月間のは種作業から始まります。細やかな育苗管理を経て、4月下旬から5月中旬にかけて定植を行います。今年



広大な畑でも生育の確認はこまめに行う。

を逃さず撒くことが大切です」とお話しを続けます。

白斑葉枯病*、小菌核病の 防除にアフェットフロアブル

*北海道病害虫防除ガイドでは「白斑葉枯病(灰色かび病)」と記載

置戸町を含むJAきたみらい管内では、以前から白斑葉枯病、小菌核病が常発し、問題になっていました。奥山さんの圃場も例外ではなく、病害の発生は就農時から悩みの種でした。「当時はまだこれらの病気に登録のある殺菌剤がほとんどありませんでしたが、数年前から登録を取った薬剤がいくつか出てきました」。その中から奥山さんが選んだのがアフェットフロアブルでした。新規系統ということで試してみたところ、高い予防効果を実感。「たまねぎの病気は予防が大事。アフェットは白斑葉枯病、小菌核病の2つに登録があり、同時防除できる点もいいと思いました。今は(重要防除時期である)6月下旬の防除に取り入れています。病気に困っていた昔に比べ、今は安心です」と評します。



今年導入した新しい収穫機。作業時間も短縮でき、「早く使いたい。収穫が楽しみ」と話す。

農作業の効率化にも一役

今後の課題を尋ねると、「農作業の効率化」とのこと。「農業はとにかく天候との勝負。雨が降ると圃場に入ることができません。限られた時間の中で、必要なことをどれだけ効率よくできるかが大切。農薬散布もできるだけ回数を少なくしたい。アフェットは混用できる薬剤が多くあるので、使い勝手もよく、作業の効率化に繋がります」と、効果とは別のメリットも見出された様子です。

「あとは土地整備ですね。この辺りは均平に見えますが、場所によって微妙な高低差があるので、雨の後は水が貯まってしまいます。昔から均平化を進めていますが、最近ではGPS等を使って、測定の精度を上げています。整備後は作物の育ちも良くなっているのが分かるんですね」と笑顔でお話をされました。

全てはより良いたまねぎを作るため、奥山さんの挑戦はまだ続きます。

(産地情報)

置戸町は大雪山系を源とする常呂川が流れ、肥沃な土に恵まれています。日照時間が長く、冬と夏、昼と夜の寒暖差が大きい環境で育つたまねぎは、しっかりとした球のしまりと、加熱することで強まる甘みが特長です。

奥山さんのアフェット®フロアブルの使い方 (中生～中晩生品種の場合)





重要病害の同時防除ができて便利。 フロアブルという 製剤も魅力的でした。

北海道富良野市

JAふらのたまねぎ部会 会長

菊地 洋夫さん

【プロフィール】

たまねぎ農家の2代目。高校卒業後に就農。たまねぎを12ha(北もみじ2000、北はやて2号、オホーツク222など)のほかに、麦3haを作付。

「いいものをたくさん獲る」 ためにこだわりの土作り

北海道のほぼ中央に位置する富良野市を含めたJAふらの管内では、肥沃な土と豊かな自然環境を活かし、野菜、水稻、麦類など、様々な作物が栽培されています。中でもたまねぎは、2400haの作付面積があり、北海道で2番目の生産量を誇る主要作物です。

この地で30年間、たまねぎ作りに携わる菊地さん。栽培のこだわりを伺うと、10年以上続く土づくりとのこと。「牛ふんたい肥を、10a当たり1~2t、毎年欠かさず圃場に入れていきます。土も柔らかくなり、水持ちもよくなりますね」。

最近では気温の変化や急な雨、干ばつなど、気候の変動を感じることも多いとのことですが、「その影響を最小限に抑えるためにも、土壌作りが一番意識をしています。他にも麦との輪作や、緑肥(ひまわり)を活用していますが、土作りの積み重ねが毎年の収量の安定に繋がっていると思います。『いいものをたくさん獲る』というのが生産者にとって一番の目標ですからね」と力を込めます。

ローテーションの要所の時期に アフェットを採用

「北海道は涼しいというイメージがあるかもしれませんが、最近では湿度が高く、じめっ

とした天気が続いたり、今年も5月には35℃まで上がった日もありました。高温多湿になると病害虫も心配になるし、そういうときは防除も徹底して行います」。

JAふらのは、たまねぎの重要病害である白斑葉枯病*、小菌核病の防除にアフェットフロアブルが採用され、菊地さんも長く使用されています。「昔は白斑葉枯病と小菌核病で、それぞれ異なる薬剤を使っていましたが、アフェットは同時防除ができるので大変助かりました。病害防除は予防散布が大切で、たまねぎでは7月後半の倒伏前まで白斑葉枯病を発病させないことを意識しています。アフェットは初発が予測される一歩手前の6月中下旬からのローテーション防除の要所となる時期に、2回取り入れています。適期を逃さずに散布すれば病気は抑えられ、効果の高さを感じています」と、信頼を寄せている



GPSを導入したトラクター。
GPSにより肥料の散布時間は半分に削減。



取材時はたまねぎの収穫の最盛期。
JAふらのの選果場には数多くのコンテナが並ぶ。

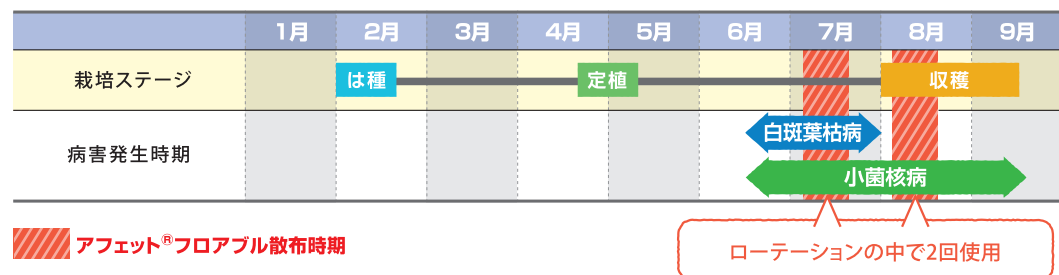
ご様子。また、フロアブルという製剤にも魅力を感じたそうです。「水によく溶けて使いやすい、液体なので薬量も量りやすい。他の薬剤との混用も問題ありません」と、目を細めます。

*北海道病害虫防除ガイドでは「白斑葉枯病(灰色かび病)」と記載

省力化に向けて ドローンによる防除に期待

今農業で注目していることは?という質問に、菊地さんはスマート農業を挙げます。「4年ほど前にGPSを導入しました。肥料散布で活用していますが、トラクターの走る場所が固定されるので、肥料もムラなく圃場に均一に撒くことができます。作業効率も上がりますし、玉の大きさも揃うと生育にもいい影響が出ていると思います」。今後の省力化ではドローンでの防除に期待を寄せています。「雨が続きと防除が必要なおきでも圃場に入れませんが、そんなときにドローンで農薬が散布できれば、雨が上がってすぐに防除できますからね。たまねぎでもドローン散布ができる高濃度少量散布で効果がある農薬が出てきてくれればうれしいです(笑)」。

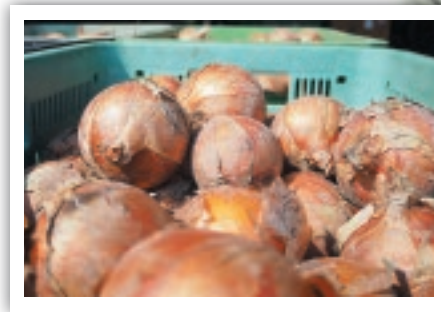
菊地さんのアフェット®フロアブルの使い方



〔産地情報〕

ラベンダー畑でも有名な富良野市は、北海道のほぼ中央に位置し、美しい田園景色が一面に広がっています。JAふらの管内では、肥沃な土と豊かな自然環境を活かし、様々な作物が栽培されていますが、たまねぎは2400haの作付面積があり、北海道でも主要の生産地です。

導入のきっかけはレタスでした。 ローテーションの要に愛用しています。



たまねぎは選果場に集荷され、乾燥後に順次貯蔵・出荷。



兵庫県南あわじ市
仁里 一郎さん

【プロフィール】

JAあわじ島を2年前に退職し、専業農家へ。たまねぎ80a(ターザン、もみじ3号など)、レタス1.2ha(ラプトル、スマイリーなど)、はくさい1.4a、水稲1haを作付。

首が細く締まった状態で 収穫し、棚持ちを安定化

市場や消費者からの人気が高い淡路島産の野菜。中でもたまねぎは甘みが強く、やわらかい食味で広く知られる代表的存在です。では、なぜ「淡路島たまねぎ」はとりわけ美味しいと言われるのでしょうか？JAあわじ島で2年前まで営農指導に従事し、現在は専業農家の仁里さんにその理由を伺いました。

「土壌養分がたまねぎに適しているんでしょうね。それと、11～12月に定植し、翌年の5～6月に収穫するので生育期間が長く日照量が豊富なこと。また、収穫後は1ヵ月以上かけてゆっくりと乾燥させることで甘みが増します」。

淡路島のたまねぎは、稲刈り後の田んぼで栽培されています。そうすることで連作障害を抑え、毎年たまねぎを作付することが可能なのだとか。栽培のポイントについて仁里さんはこう言います。

「収穫時に肥効がしっかりと切れた状態ないと流通した際の棚持ちが悪くなる。たまねぎの首の部分が細く締まっているのが肥効が切れている状態なので、それをしっかりと見極めて収穫します」。

また、肥大期に圃場が乾きすぎると小玉傾向になるそうなので、晴天で乾燥が続くとき

はうね間灌水を適宜実施するのがポイント、とのことでした。

淡路島特産品に登録が多く、 収穫前日まで使えて便利

淡路島で油断できない重要病害のひとつとされているのが『灰色腐敗病』です。

「灰色腐敗病は、生育期間中防除が必要な病害です。防除がしっかりしていないと貯蔵球や冷蔵保管中にも発病し、そこからかびの

胞子が飛散して感染源となってしまいます」。専業農家となった今でも、JAの防除暦どおりに、中生・晩生たまねぎの灰色腐敗病、灰色かび病対策として、ローテーションの中で3月、4月、5月の3回、アフェットフロアブルを使用しています。

「最初はレタスに使っていたんです。レタスは天候の影響で収穫が早まったりするので、収穫前日まで使えるアフェットは便利なんです。レタスへの効果は実感してい

たので、5～6年前からたまねぎにも導入するようになりました。灰色腐敗病、灰色かび病対策剤は3剤をローテーション使用していますが、アフェットは予防効果が高いのでその要的な存在ですね」。

営農指導員の時代から、アフェットは指導しやすい剤、と仁里さんは言います。たまねぎをはじめ、レタス、はくさい、キャベツ、ブロッコリーといった淡路島特産の野菜に登録があり、しかも収穫前日まで使えるのがその理由なのだとか。



淡路島たまねぎはゆっくりと乾燥させることで甘みが増す。乾燥後に順次貯蔵・出荷。

「フロアブルだから粉立ちもないし、混用事例も多くて使い勝手がいい。たまねぎには4回まで使えるので、ローテーション防除の中にしっかりと組み込めるから助かりますね」とその使いやすさを実感している様子でした。

「消費者にとっても、私たち農家にとっても安全・安心な野菜づくりをモットーに、たまねぎの品質を高めていきたい」と話す仁里さん。こうしたつくり手のゆるぎないポリシーが、淡路島たまねぎの品質を支えていると言っても過言ではないはずです。

《産地情報》

現在では少なくなりましたが、たまねぎを吊るして自然乾燥させる『たまねぎ小屋』も、昔ながらの乾燥・貯蔵法で、淡路島の風物詩とも言われています。

仁里さんのアフェット®フロアブルの使い方 (中生・晩生たまねぎ)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
栽培ステージ			栽培			収穫			は種		定植	
病害発生時期			灰色腐敗病									

アフェット®
フロアブル
散布時期

灰色腐敗病が発生しやすい3～5月の間に
ローテーションの中で3回散布